

アパ第3回懸賞論文

(真の近現代史観) 「大東亜戦争は無謀な戦争であったのか?」

平成22年8月27日 諸橋茂一

【はじめに】戦後長期間に亘り、「大東亜戦争は無謀な戦争であった。」と言われ続けている。しかし、本当に「大東亜戦争」は無謀な戦争であったのだろうか? また、平成に入ってから首相は何度も、「先の大戦は侵略戦争だった。」として、「謝罪談話」なるものを繰り返し発表している。しかし、本当に「大東亜戦争」は侵略戦争だったのだろうか? それらのことについて検証してみたい。

去る8月10日、「菅謝罪談話」が発表された。その骨子は、「我が国は、軍事力を背景として、韓国国民の意に反して韓国を併合した。(我が国は韓国民の)国と文化を奪い、植民地支配によって、(韓国民に対して)多大な損害と苦痛を与えました。心からお詫び申し上げます。」というものである。しかし、少し真面目に当時の歴史の流れを勉強すれば、その様な歴史観は大きな間違いであることは誰でも分かる。仮に、歴史的事実が同談話どおりであったとしても、世界の普通の国々はその様な首相謝罪談話を発表することはまずあり得ない。しかも、同談話の内容は歴史的事実に全く反するのである。実に馬鹿な談話を性懲りもなく発表したものだと言わざるを得ない。

普通の国の首相や大統領は、その国の国益と誇りと名誉を守るために全力を尽くしているはずである。尨が、我が国の首相だけは全く逆に、国益と誇りと名誉を損なうために努力していると思えない。今の我が国の外交姿勢は大きく間違っている。

日韓併合の前年、1909年10月26日、朝鮮人・安重根が我が国の初代首相であり、当時、朝鮮統監府の統監であった伊藤博文をハルピンの駅でいきなり暗殺してしまった。当時の我が国は、明治27年(1894)～28年、李氏朝鮮の宗主国であった清国相手に戦い、これに勝利し、清国に李氏朝鮮の独立を認めさせ、同33年(1900)の北清事変(義和団事件)にも勝利しただけではなく、明治37年(1904)～38年、何と当時世界一の陸軍大国であったロシアを相手に正面から正々堂々と戦い、陸海の戦い共に見事勝利した世界有数の軍事大国であった。当時の我が国は今の日本の様に卑屈な自虐国家では無かったのである。その日本の初代首相を暗殺したということは一つ間違うと、当時の大韓帝国(李氏朝鮮)は一気に殲滅されかねない恐れさえあった。(当時の我が国と大韓帝国との軍事力は全く比較にもならぬくらいに我が国の方が圧倒的に上回っていた。)

当時は、オーストリアの皇太子がセルビアの一青年に暗殺された事によって、第一次世界大戦(大正3年(1914)～7年)が始まった様に、朝鮮の一青年が「大日本帝国」の初代首相を暗殺したということは大韓帝国にとっては一つ間違うと国家の存亡に関わる大事件だったのである。そこで、当時の大韓帝国は、100万人の会員を擁するとされた民間団体「一進会」の意見も取り

入れる形で、我が国に対して併合を望んできたのである。そこで、我が国は、当時の主な先進諸国(数カ国)にも相談した結果、何れの国も反対が無く、それどころか、多くの国々は賛意を示したため、大韓帝国の要望を受け入れる形で、明治43年(1910)8月22日、寺内正毅(まさたけ)統監と大韓帝国の李完用首相が正式な条約(日韓併合条約・韓国併合条約)を結んで大韓帝国を併合したものである。我が国は決して大韓帝国を武力併合した訳ではないのである。

韓国や北朝鮮は、「韓国併合は無効だ」と理不尽な主張をしているが、2001年に米ハーバード大学で開催された国際会議においても、その様な韓国の主張は退けられ、韓国併合の合法性が認められているのである。

我が国は、大韓帝国を併合した後、(藤岡信勝拓殖大学教授によると、現在の貨幣価値に換算すれば約60兆円とも言われる)膨大な予算と多くの人材を投入して、5,200を超える小学校並びに1,000を超える師範学校や高等学校を造り、何と、大阪帝大や名古屋帝大よりも先に京城帝大を造り、ハングル文字を普及させ、識字率を4%から61%にまで向上させ、殆ど無かった鉄道を6,000kmも敷設し、多くの港湾を整備し、禿山に6億本もの樹木を植林し、多くの道路や橋や当時世界最大級の水豊ダムも築造し、多くの工場を造り、反当たりの米の収穫量を3倍にした事を含めて農業生産性を飛躍的に向上させると共に、朝鮮の極めて低かった衛生観念を向上させ、多くの病院を建設して、24歳だった平均寿命を30年以上も伸ばし……我が国は朝鮮半島における35年間、その様な必死の努力を重ねて朝鮮の近代化の基礎を築いたのである。(我が国は台湾にも同様の施政を続けたのである。そのため台湾では、その事(日本の施政)を好意的に受け止めている国民が非常に多い。処が、韓国(並びに北朝鮮)では、各々の国における戦後教育において、日本に恨みを抱かせる様な捏造した歴史を教え続けているために、多くの国民が非常に大きな誤解をしているのである。)

その様な流れ、歴史の真実は我が国の戦後教育では殆ど教えられていない。しかし、少し真剣に(独学で)勉強すれば誰でも分かることである。にも拘わらず、それなりの大学まで出た(入学した)はずの首相や官房長官があまりの不勉強なるが故に、まるで我が国が一方的に悪かったかの様に大きな誤解、曲解をしているのである。そして、その様な状況は、決して現首相特有のものでもなく、平成に入ってから首相の多くは似たり寄つたりの自虐史観しか持ち合わせていない(いなかった)のである。今回の「菅談話」だけではなく、「河野談話」並びに「村山談話」及び「小泉談話」も全く同列のものである。そして、それらの自虐談話を発表したことが、我が国の国益と我が国並びに(父祖の方々を含む)国民の名誉と誇りをどれだけ大きく損い続けているか測り知れない。併せて、それらの自虐謝罪談話を放置すれば、我々の子孫に対しても、全く不必要な負い目と贖罪意識を負わせ続けることにもなる。

小生が平成19年3月29日、「河野談話」並びに「村山談話」及び「アジア女性基金」の正当性を問うて、村山富市元首相を東京地裁に提訴し、最高裁まで争った裁判の中で、村山富市元首相は何と6人もの弁護士を立ててきたが、それらの正当性はただの一言も説明出来なかったのである。(発表した本人が、その正当性をまともに説明も出来ない)その様に好い加減なものを正に性懲りもなく、何度も政府が発表し続けるのは一体何故なのか?

我が国の政府中枢に位置する者ばかりではなく、国民の多くも日本人としての自信と誇りを持ってなくなってしまっている。日本人でありながら、かけがえのない祖国日本に対して愛国心と誇りを持ってないだけでなく、本来は多くの父祖の方々に対して深い敬意の念と畏敬の念並びに感謝の心を強く抱くべきである処を全く逆に、父祖の方々に対して嫌悪感を抱き、全く不必要な贖罪意識さえ抱いている国民が政治家並びに官僚及びマスコミ関係者を含めて相当数いる。

それは一体何故だろうか？ 多くの要因が複層している面もあるが、それらの原因の中で非常に大きなものは戦後長期間に亘って続けられてきた日教組の反日偏向自虐教育と多くのマスコミの反日偏向報道にあると言わざるを得ない。そのことを含めて我が国の真の近現代史を検証すると共に今後のあるべき姿を求めたい。

1. 【日教組の反日偏向自虐教育と多くのマスコミの反日偏向報道の弊害】

戦後長期間に亘る日教組主導の反日偏向自虐教育並びにマスコミの反日偏向報道のために(前述のとおり)日本人の多くが、日本人としての自信と誇りを持ってなくなってしまっている。特に、昭和57年、鈴木善幸内閣当時の官房長官、宮沢喜一が(「中国、韓国の御意向を踏まえた内容の教科書にします」という実に馬鹿げた)「近隣諸国条項」なるものを発表してからの教科書はどんどん歪んだ内容となってしまっている。現在の我が国の教育が如何に歪んでいるかという例(の一部)を以下に記す。

今使用されている小学校用並びに中学校用歴史教科書の多くが聖徳太子のことは、「厩戸皇子(うまやとのみこ・うまやどのおおじ)」と記述し、(世界最大のお墓である)「仁徳天皇御陵」は「大仙古墳(だいせんこふん)」と記述している。また、今や全くの作り話であることがほぼ明らかとなっている(所謂)「南京大虐殺」なるものを実際にあったかの様に記述している。その一方で、二宮尊徳を始めとする我が国歴史上における素晴らしい人物についてはどんどん教科書から消してしまっている。併せて日本人としての自信と誇りを持つことに繋がる様なことは出来る限り教えなくしてしまっている。(所謂)「南京大虐殺」や(所謂)「慰安婦強制連行」なるものは全くの「つくり話」である。(富士信夫著「南京大虐殺はこうしてつくられた」、東中野修道著「徹底検証 南京大虐殺」他参照)

2. 【誇るべき史実】

実は我が国こそは世界で最も誇るべき国なのである。日本人として誇るべき史実等の幾つかを列挙してみたい。

①「明治23年(1890)9月16日、我が国に来航したオスマン帝国(現在のトルコ)の軍艦『エルトゥールル号』が和歌山県串本沖で遭難し、乗組員587名が死亡若しくは行方不明となり、69名が地元の人達に救助された。地元大島村(現在の串本町)檜野の住民達は総出で救助と生存者の介抱に当たった。救助された人達は、同年10月5日に東京の品川から出港した日本海軍の『比叡』と『金剛』、二隻の軍艦によって、翌明治24年(1891)1月2日、無事オスマン帝国の首都イスタンブールに送り届けられた。」という話がトルコの小学生用教科書に載っているため、トルコの人達は皆この話を知っているということであるが、日本人の多くは知らない。

②「日露戦争」において、我が国が明治38年(1905)3月10日の「奉天会戦」並びに同年5

月 27 日の「日本海海戦」等を含めて正に奇跡的な大勝利を取めた後、(長期間、ロシアから迫害を受け続けていた)フィンランドでは、東郷平八郎元帥のラベルを貼った「トーゴービール」を作って売り出し、その後約 100 年間売り続けていた。(今はオランダのビールメーカーで販売している。) ③同じく、日露戦争における我が国の大勝利に感動したトルコでは、当時の首都であったイスタンブールのメインストリートに東郷平八郎、乃木希典、児玉源太郎の名前を取って、それぞれ、「トーゴー通り」「ノギ通り」「コダマ通り」と名前を変えた。④今、世界で用いられている「円周率」に限りなく近い値を世界で初めて算出した数学者は「村松茂清」(1605~1695)という江戸時代初期の数学者である。村松茂清は「円に内接する正八角形」を描き、その正八角形の外周の長さを求め、次にその正八角形を二等分して、正十六角形の外周を求め、更にそれを二等分して、正三十二角形…と計算を続け、何と正 32,768 角形という超多角形の外周、即ち限りなく円周に近い値を求めてその長さとお角線(直径)との比を求めた。その結果、当時用いられていた 3.162 という円周率の値は不適当で、3.14(15926)とすべきであるとした。そして、そのことを寛文 3 年(1663)、「算組(そ)」という本で発表したのである。⑤やはり、江戸時代初期の数学者、関孝和(1642~1708)は世界で初めて微分積分に関する理論を纏めた。(理論完成の一手前まで辿り着いた)

⑥木村栄(ひさし)(1870~1943)は、明治 35 年(1902)に、地球の自転軸(23.4° 傾斜している)には若干のブレがあることを発見し、それを Z 項として発表した。そのことがその後の宇宙開発にも多大な貢献を果たしている。そのために、その功績を称えて、1970 年、月面にあるクレーターに「キムラ」の名が付けられている。⑦我が国の台湾統治時代、八田與一技師が当時東洋一と言われた「烏山頭水庫(ダム)」を建設した事は今でも台湾の多くの人々から感謝されている。

⑧我が国(の先人)は、5 世紀に、世界最大のお墓である「仁徳天皇御陵」を造り、⑨推古 15 年(607)には世界最古の木造建築物である法隆寺を、そして、⑩天平勝宝 4 年(752)には世界最大の木造建築物「東大寺」を建立した。⑪長保 3 年(1001)、紫式部が世界最初の女流長編小説「源氏物語」(全 54 帖)を著した。(欧米に女流文学らしきものが出てきたのはそれよりも遙か後、17 世紀になってからという。) 挙げればきりが無いくらいに、我が国が世界に誇るべき史実は実に多く有る。(しかし、それらの多くは学校で(詳しく)教えられていない。)

3. 【大東亜戦争並びに支那事変の真実】

① ここで、大東亜戦争並びに支那事変(日中戦争)に関する流れを時系列的に辿ってみたい。始めに大東亜戦争に関する歴史経過を簡単に振り返ってみたい。明治 38 年(1905)、我が国がロシアを撃ち破り、同年 9 月 5 日ポーツマス条約が締結された。その翌年、同条約の仲介を成した米国は何と我が国を仮想敵国として「オレンジプラン」を策定し、その後何度もそれを見直ししていたのである。

その後、米国は大正 13 年(1924)7 月 1 日、何と(日系米人には土地所有の権利を一切認めないという)日系米人迫害法である「排日移民法」を施行し、日系米人迫害を始めたのである。

昭和 16 年(1941)7 月 25 日、米国は我が国の「在米資産」を一方的に凍結してしまった。同年、8 月 1 日に、米国は石油の完全禁輸に踏み切った。(当時、我が国は、石油の約 8 割を米国

から輸入していた。) その前には、屑鉄、ゴム、錫等も禁輸していた。その様にして米国は我が国に対する経済圧迫(経済封鎖)を強め続けたのである。何れの経済封鎖についてもイギリス、オランダもそれらに追随した。

昭和 14 年(1939)9 月 1 日、ドイツのポーランド侵攻によって始まった第二次世界大戦は当初ドイツが圧倒的に優勢で、翌昭和 15 年(1940)6 月 14 日には、ドイツはフランス・パリを占領し、ビシー政権という傀儡政権を作り、イギリスにも猛爆を加え続け、イギリスの陥落も時間の問題と見られていた状況の中で、イギリスのチャーチル首相(当時)は米国のフランクリン・ルーズベルト大統領(当時)に対して援軍要請を繰り返した。しかし、当時の米国世論の 90%は「(ヨーロッパ戦線)参戦反対」という状況であったことと、ルーズベルト自身の三選目の大統領選(昭和 15 年 1 月 5 日)における最大公約が「絶対に戦争には参加しない。」というものであったため、簡単には参戦出来ない状況にあった。但し、ルーズベルトの本心としては、何とか(元の宗主国)イギリスを助けたいという思いと 1929 年以来続いていた世界大恐慌から抜け出すためという理由から参戦の機会を探ろうとしていた。

その様な状況の中で、昭和 16 年(1941)8 月 9~12 日、チャーチルとルーズベルト両者によって「大西洋洋上会談」が行われた。その結論としては、「(その前年に)ドイツと日独伊三国軍事同盟を結んでいた日本を追い詰め、日本に第一撃を撃たせる。もしも、日本が攻撃してきたならば、日本に反撃すると同時に、『日本と同盟を結んでいるドイツも許さない。』という口実をつけてヨーロッパにも本格的に軍隊を送ろう。」という謀略を描いたのである。(誠に残念ながら、その後の流れはほぼ米英の描いた通りの方向で進んでしまった。)(ロバート・スティネット著「真珠湾の真実・ルーズベルト欺瞞の日々」他より)

②【フライングタイガース】(AVG)

同年の 8 月、米国は(空軍力の弱かった)蒋介石率いる国民党軍と、「航空戦力に関する援軍協定」を結び、同年 10 月 20 日には「フライングタイガース(飛虎隊)」と名付けた 100 機規模の米国空軍が中国の昆明付近で日本軍に対する攻撃を開始したのである。その後も同「フライングタイガース」は日本軍に対する攻撃を繰り返し、日本軍に対して大きな損害を与え続けていた。何とそれは日本の真珠湾攻撃より 1 ヶ月半も前の事であった。(以上、中国北京郊外にある「航空博物館」の展示説明他による。)

③【真珠湾攻撃】

米国は英蘭支等と組み、我が国に対して ABCD ラインによる経済封鎖を続けた上に、同年 11 月 26 日、(コミンテルン)の意図も背景に)我が国としては到底受け入れることの出来ない(最後通牒)「ハルノート」を突き付けた。我が国は大きな苦悩の中で、止むを得ず「大東亜戦争」開戦を決意せざるを得なかったのである。真珠湾攻撃の日、昭和 16 年(1941)12 月 8 日(米国は 12 月 7 日)は米国では日曜日であった。しかし、我が国の攻撃を予測して臨戦態勢をとっていた米国は、同日、「太平洋艦隊」に対して「禁足令」(外出禁止令)を出して、全員待機させていた。そのために、結果的に米国太平洋艦隊は約 3,370 名もの戦死傷者(米陸海軍報告による)を出したのである。

その後、米国が常套句とした「リメンバー・パールハーバー」は、米国の歴史上3度目の「リメンバー・…」だったのである。第1回目は、1836年に(メキシコを陥れて、メキシコの広大な領土を奪い取った)「リメンバー・アラモ」、第2回目は1898年に(スペインを陥れて、フィリピン他の植民地を奪い取った)「リメンバー・メイン号」である。1776年、僅か13州で独立した米国は、正義を装った(謀略)「リメンバー・…」の度に領土他の権益を大きくしてきたのである。(現在50州)決して米国が正義の使者でも何でもないことを日本人は知るべきである。

④【支那事変】

次に支那事変について触れたい。昭和11年(1936)12月12日、日本軍と蒋介石軍を戦わせて漁夫の利を得ようと考えた毛沢東率いる(弱小)共産勢力が、(コミンテルンの意向も背景に)張学良を使って西安で蒋介石を軟禁し、蒋介石に日本軍と戦うことを約束させた。処が、蒋介石がなかなか日本軍と戦おうとしなかったために、翌昭和12年(1937)7月7日、毛沢東共産勢力(劉少奇)が日中両軍を戦わせる目的で日中両軍に発砲して「盧溝橋事件」を引き起こした。しかし、同事件は4日後に停戦協定が締結されて一旦納まってしまった。それでは都合が悪かった毛沢東共産勢力は、「通州事件」を引き起こさせた。7月29日、通州市に居た日本民間人に「保安隊(中国人部隊約3,000人)」がいきなり襲い掛って223名を虐殺したのである。(中村繁著「大東亜戦争への道」並びに当時の新聞他による。)

それでも当時の日本政府(近衛内閣)は「不拡大方針」を堅持していた。しかし、その後、蒋介石軍側(保安隊)が上海で同年8月9日、「大山大尉惨殺事件」を引き起こし、更に同月13日、張治中率いる蒋介石軍(約3万人)が日本海軍陸戦隊(約4,200人)にいきなり攻撃を仕掛け、日本側は多数の死傷者を出すに至った。翌8月14日、蒋介石軍は上海にあった租界(外国人居住区)に対しても無差別空爆を加え、同空爆による民間人被害も甚大なものがあつた。(同日だけで約1,400人も死傷者が出たという)そのため、我が国はやむを得ず二個師団を上海に派遣したのである。そして、それがその後8年間続く「支那事変」となったのである。

4.【GHQの日本弱体化統治政策】

米国は戦争に勝ったとはいうものの、国際法に大きく違反して、「広島、長崎への原爆投下」並びに昭和20年3月10日の「東京大空襲」及び「沖縄」を含めた「全国の64主要都市に対する無差別空爆」等によって数10万人の日本民間人を虐殺してしまった事が戦後厳しく糾弾されることを恐れて、全く逆に、日本人に一方的贖罪意識を植え付けるために、①極東国際軍事裁判(所謂「東京裁判」)の中で、中国と連携連動して「南京大虐殺なる虚構」を作り出したのである。そもそも、「東京裁判」の開廷そのものが国際法違反であつた。(戦時国際法「ハーグ陸戦法規」では、「戦勝国が敗戦国を裁いてはならない。」となっていた。)しかも、その「東京裁判」の中で、(所謂)A級戦犯と呼んだ方々(28人)を起訴した日は昭和21年4月29日、何と昭和天皇のお誕生日であり、その方々に一方的濡れ衣を着せて(7人)絞首刑にした日は昭和23年12月23日、つまり今上陛下(当時の皇太子殿下)のお誕生日だったのである。しかも、「東京裁判」では、近代裁判の大原則を全く無視して、「平和に対する罪」並びに「人道に対する罪」などという「事後法」で裁いたのである。「東京裁判」なるものは正に見せしめ劇以外何ものでも

なかったのである。にも拘わらず、「A 級戦犯が合祀されているから靖国参拝するな。」と中国や韓国に言われて、我が国の首相がビクついて参拝しないということは実に情けないことである。中国や韓国が如何に理不尽な事を言おうとも我が国の首相は全国民を代表して堂々と参拝すべきである。

上記東京裁判の他にもマッカーサー並びに GHQ は 6 年 8 カ月の占領統治期間中、様々な日本(並びに日本人)弱体化政策を徹底したのである。それらは、「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」並びに「3R5D3S 政策」と呼ばれるものが基本政策となっている。(安岡正篤著「運命を創る」より)

具体的には、(東京裁判の他に)②「約 20 万人の公職追放」、③「マスコミに対する完全統制」(連合国並びに GHQ に対する批判は一切許さず、旧日本軍が如何に酷い事をしたかという虚偽の報道を続けさせた。)、④7,769 点(種類)の「焚書坑儒」(連合国にとって不利益となる可能性の有る書籍を強制的に没収し焼却処分させた。)、⑤(フィリッピン憲法を基にして、マッカーサーの部下に命じて僅か 1 週間で英文で作成させたものを和訳させた)「現憲法」の押し付け、⑥GHQ 並びに連合国に対する批判は一切許さないという事を含む GHQ の 30 項目の命令、⑦農地解放、⑧財閥解体、⑨内務省の解体、⑩日本が如何に間違っていたかという歪んだ教育の強制、⑪教育勅語の廃止、⑫武道の禁止、等々日本人並びに我が国を弱体化させるために、マッカーサー並びに GHQ はあらゆる手段を講じたのである。

5. 【大東亜戦争の縮図・インドネシア独立戦争】

我が国がポツダム宣言を受け入れて降伏したのは昭和 20 年(1945)8 月 15 日、我が国が 3 年半、軍政統治を続けたインドネシアには、戦後、当初イギリス軍が、その後オランダ軍が再占領する様に(インドネシアに)入ってきた。しかし、日本軍に直接間接に教育を受けていた(約 38,000 人とも言われる)インドネシアの青年達は、「二度と植民地になってたまるか!」という思いで独立義勇軍「ペタ」並びに多くのゲリラ部隊を組織し、オランダ軍と戦い出した。しかし、実戦の経験の無いインドネシアの青年達は次々に斃れていく。その状況を目の当たりにして、「インドネシアの青年達を見捨てて日本へ帰る訳にはいかない」との思いを強く抱いた多くの元日本兵がインドネシアに残留し同国の独立戦争に身を投じた。約 4 年半に亘る独立戦争で多大な犠牲を払ってインドネシアは昭和 24 年 12 月 27 日、漸く独立を果たしたのである。

その様な事実を知った筆者は平成 15 年 3 月、単身インドネシアに行き、同独立戦争を戦われた元日本兵お二人(宮原栄治氏並びに藤山秀雄氏)にお会いすることが出来た。同独立戦争は(その後のベトナム戦争の様な)ゲリラ戦を主体として戦ったということであり、ゲリラ部隊のリーダーとなったその多くは元日本兵であったという。(ベトナム独立戦争には、約 800 人の残留元日本兵が参戦したという。)

お二人から上記の他に(重複する処もあるが)以下の様なお話を直接お伺いすることが出来た。「インドネシアに派遣されていた我々は『インドネシアを解放する。』という使命感を持って戦っていた。処が誠に残念ながら志半ばで我が国は負けてしまった。自分達が直接間接に教育したインドネシアの青年達が『ムルデカ(独立)』を合言葉にオランダ軍と戦い、多くの青年達が斃れ

て行くのを見捨てて日本へ帰る訳にはいかない。『どうせ、死ぬ気でインドネシアに来ていたのだから…』というそれぞれの思いで約 1,000 人の元日本兵が個々の判断でその独立戦争に身を投じて戦い、約 700 人が戦死した。生き残った元日本兵の多くが、インドネシア独立戦争に参戦した者に対する勲章である『ゲリラ勲章』を授与され、特に大きな功績のあった者 6 名は、インドネシア国における最高の勲章である『ナラリア勲章』を授与された。インドネシアの独立記念日は(戦後の日本ではもう使われなくなってしまった)『皇紀』を使用して、『(皇紀)2605 年 8 月 17 日』と表記されている。ゲリラ勲章等を授与された我々元日本兵が死ぬと、その棺にはインドネシア国旗がかけられ、インドネシア国軍の儀仗隊に担がれて、礼砲が撃たれ、(ジャカルタの)国立カリバタ英雄記念墓地』に丁重に埋葬されている。……」 インドネシア独立戦争に参戦された元日本兵の方々から上記の様なお話をお伺いして改めて強く感じたことは、「(我々は戦後長期間に亘り、日教組による非常に歪んだ教育並びに多くの反日マスコミによって全く逆の歴史観を植え付け続けられているが、)「インドネシア独立戦争は正に『大東亜戦争』の縮図である。」という強い思いであった。インドネシアとベトナムだけではなく、ビルマ(ミャンマー)やインド並びにマレーシア他、その他の東南アジア諸国の独立にも我が国は多大な犠牲を払って大いなる貢献を果たしたのである。

「大東亜戦争」はその名のとおりに、「我が国を護るためとアジアを解放する為の戦いだった」のである。断じて、「村山談話」に有る様な「侵略戦争では無かった」のである。(小生の父を含めて)アジアを侵略する為に戦った日本人は唯の 1 人もいなかったのである。当時の我が国政府が「自存自衛の為にアジアを解放する為にやむなく戦う」と発表したことはあっても「アジア侵略戦争をやる。」と決定或いは発表したことは一度も無いし、当時の責任ある立場の者で、「アジアを侵略せよ。」と命令した人間も唯の 1 人もいなかったのである。

(繰り返しになるが)戦後は大きく歴史が捻じ曲げられてしまっているが、「父祖の方々是我が国を護るためと(長期間、欧米の植民地となっていた)アジアを解放するためにやむ無く戦われた」のである。(その事は「開戦の詔書」にも明らかである。にも拘わらず、今の我々が我が国の歴史を勝手に捻じ曲げる事など許される事ではない。)

6. 【「日露戦争の勝因」と「大東亜戦争の敗因」に関する検証並びに総括】

「(所謂先の大戦)『大東亜戦争』は無謀な戦争であった」と言われている。しかし、果たして大東亜戦争は無謀な戦争であったのだろうか? 実は、当時の米国は太平洋と大西洋、両方に海軍を展開せざるを得ない事情があった。

開戦時における日本海軍と我が国が主に戦った米国太平洋艦隊との総合戦力比は(日本と米国の空母数が 10 隻対 3 隻であったということを含めて)我が国の方が米太平洋艦隊よりも 3 倍くらい上回っていたのである。(以上、中川八洋著「山本五十六の大罪」より)

戦後、長期間に亘り、「無謀な戦争」と言われ続けてきた「大東亜戦争」は(戦力面から見れば)決して無謀な戦争とは言えなかったのである。当時の米国の工業生産力が当時の我が国のそれを遥かに上回っていたことをもって、「無謀な戦争であった」という人がいるが、若しもその様な理屈が適正であるならば、世界第二位の経済大国、現在の我が国は米国以外の何れの国と戦争

をしても必ず勝つということになる。しかし、そうはならないであろう。

それに比べて、明治 37 年(1904)～38 年、我が国がロシアと戦った日露戦争は正に「無謀な戦争」であった。日露戦争開戦時における我が国とロシアとの大砲の数は、(大小合わせて)日本が 636 門、一方ロシアは 12,000 門、ロシアは日本の約 20 倍の大砲を有していたのであり(防衛省戦史研究所の資料より)、そのことを含めて、日露戦争開戦時における我が国とロシアとの総合戦力はロシア側が我が国の約 10 倍であった。(ロシアは当時、世界一の陸軍大国であった。)

「日露戦争」こそは正に無謀な戦争だったのであり、それに比べれば「大東亜戦争」は決して無謀な戦争とは言えなかったのである。「無謀な戦争であった『日露戦争』は何故勝てたのか? それに比べれば決して無謀な戦争とは言えなかったはずの『大東亜戦争』は何故負けたのか?」という検証、総括、整理が敗戦後 65 年も経過しているにも拘わらず、国家として未だなされていないことも非常に大きな問題である。「勝ったからよし、負けたから全て悪かった。」という様な捉え方はあまりにも単純且つ幼稚と言わざるを得ない。「無謀であった『日露戦争の勝因』並びに(日露戦争に比べれば)決して無謀とは言えなかった『大東亜戦争の敗因』、それぞれの冷静な分析、検証並びに総括を国家として真剣に成すと共にそれらを後世に厳しく生かしていくという姿勢をしっかりと持つべきである。

①「バルチック艦隊」が来る前にロシアの「旅順艦隊」を壊滅させていた。②遠距離を大航海しながら疲れ切ってやってきた「バルチック艦隊」を非常に有利な我が国近海で迎え討った。③敵戦艦の甲板を火の海にして敵方の戦闘能力を奪ってしまうという、当時としては正に画期的な「下瀬火薬」や ④「丁字戦法」並びに ⑤ロシア側とは比較にならぬ訓練を重ねた結果としての「艦砲射撃命中率の高さ」等、日本海海戦の勝因を含めた日露戦争の勝因と、①我が国が米国から様々な圧力を受け続けていたことを何故世界のマスコミ等を通じて世界に向けて強くアピールしなかったのか? ②真珠湾攻撃の際、当初予定していた第三波攻撃を何故中止してしまったのか? ③同攻撃の際、「何故陸軍と連携して、ハワイを占領」し、我が国の前線基地としなかったのか? ④(米太平洋艦隊の後衛基地であった)サンディエゴ港を何故、攻撃破壊しなかったのか? ⑤何故、パナマ運河を占領しなかったのか?(もしも、ハワイを占領しないのであれば)⑥その時、「燃料タンク」群(400万バーレル)並びに巨大な海軍工廠を何故攻撃破壊しなかったのか? ⑦同攻撃の際、どこかへ避難していたことが予測出来たはずの米太平洋艦隊の(2隻の)「空母」を何故索敵して沈めてしまわなかったのか? ⑧昭和 17 年 6 月 5 日の「ミッドウェー海戦」時、全く無防備な 4 隻の航空母艦を何故「団子状態」で航行させたのか? ⑨「(天下分け目の戦いであつたはずの)同海戦時、世界最大の戦艦大和を何故、戦線から 540 km も離れた位置に置いていたのか? ⑩同海戦の際、何故 7 隻の戦艦を無駄に配置したのか? ⑪そのことを含めて、「(天下分け目の戦いとなるはずであった)同海戦に何故総力戦で臨まなかったのか?」⑫情報通信設備(レーダー)の未整備。⑬戦線を広げずに、何故、出来る限り我が国近海で米海軍を迎え討とうとしなかったのか? ⑬何故、海軍は(あまりにも大きな)「嘘の戦火発表」を続けたのか?(例えば、台湾沖航空戦に関しては、「空母 1 隻撃沈」という発表であつたが、実際はゼロだった。その他、海軍には過大な虚偽の戦果発表が非常に多かった。) ⑭サイパン、テ

ニアンを含めて、一度占領した島々を飛行場の整備を含めて何故「要塞化」しなかったのか？（④、⑤、⑥、⑧、⑨、⑩、⑬、⑭は「山本五十六の大罪」より）⑮米軍は我が国の全く無防備な輸送船を潜水艦等で片っ端から沈めた。（計 2,259 隻、814 万 t）その為に、前線に食糧、武器、弾薬、医薬品、衣服等が届かなくなってしまった。）にも拘わらず、何故我が国も同様の潜水艦等による「報復的米輸送船攻撃」を徹底しなかったのか？

等々を含めて、(繰り返しにはなるが)日露戦争の勝因分析並びに大東亜戦争の敗因分析、検証、総括を国家として冷静に厳しく早期に行うべきである。そしてそれらをよく整理して後世にしっかりと生かしていくべきである。真に反省すべきは「大東亜戦争は何故負けたのか？」である。

7.【結論】戦後、アジア並びに欧米の指導的立場にあった人物の多くが、「日本が日露戦争並びに大東亜戦争を通じて果たした大きな歴史的意義」を述べている。それらの多くは、「日本が多大な犠牲を払って『日露戦争』並びに『米英蘭等相手の大戦』を戦ってくれた(戦った)からこそ、それまで長期間(約 450 年間)に亘って続いた欧米の植民地主義に終止符を打つことが出来たのである。」という内容のものである。（学校では殆ど教えられていない）「真の近現代史」を真剣に勉強し、「日露戦争」並びに「大東亜戦争」を総括すれば、その様な見方が日本人としての極く自然且つ非常に素直な見方であろう。

大東亜戦争終結時点における世界の独立国の数は約 60 カ国であった。それが、我が国が多大な犠牲を払って大東亜戦争を戦った後、今では約 200 カ国と戦後急増したのである。「我が国は人類史において、『植民地解放』という実に偉大な貢献を果たした。」のである。

我が国に一方的贖罪意識を植え付けようとしたマッカーサーでさえも、昭和 25 年 10 月 15 日、ウェーキ島においてトルーマン米国大統領(当時)に対し、「東京裁判は誤りだった。」と述べ、その翌年 5 月 3 日には、米国の上院・軍事外交合同委員会において、「…Their purpose ,therefore ,in going to war was largely dictated by security」(…従って、彼ら(日本)が戦ったその多くは(日本の)自衛のためであった。)と証言しているのである。毛沢東も昭和 39 年 7 月 10 日、訪中した佐々木更三(後の社会党委員長)に対して、「日本は何も謝ることはありません。我々が政権を奪取出来たのは、皇軍(日本軍)のお蔭です。…」という意味の日本軍に対する感謝の言葉を残している。我々日本人はもう好い加減に目覚めなくてははいけない。

我々日本人は真実の歴史を取り戻し、それらの事を適正に理解すべきであり、併せて父祖の方々に対して感謝と畏敬の念を大切にすべきである。と同時に日本人としての自信と誇りを早く取り戻すべきである。「父祖の方々の尊い多くの『死』を決して無にしてはならない。」

「大東亜戦争は、断じて侵略戦争などではなく、自存自衛の戦いであつた。と同時にアジア解放戦争であつた」のであり、結果的に大敗を喫した事は紛れもない事実ではあるが、決して最初から負けると決まっていた「無謀な戦争であつたとは言えない」のである。もしも、無謀な戦争であつたならば、例え半年間でも米英蘭支濠等を相手に連戦連勝を続ける事など出来るはずが無かつたのである。

我が国の敗因を一言で言えば、(素人目に見ても、作戦が非常に甘かつたと言わざるを得ない点も多々有るが)我が国は『武士道精神』を基にあまりにも正々堂々と戦い過ぎたから負けた。」

とも言えるのである。敗れはしたが決して恥ずる事はない。

「世界の中で日本ほど誇れる国はない。」。正に「世界一誇れる国・日本」である。

戦後長期間に亘り続けられてきた日教組による反日偏向自虐教育を大きく改め、真実の歴史と1人でも多くの偉人を教えること並びに道德教育を含めて、日本人としての自信と誇りを素直に抱くことが出来る様な教育に変えて行かねばならない。と同時に、マスコミの報道も正常化させなくては行けない。我が国をいたずらに貶める様な教育並びに報道を何としてでも止めさせるべきである。何事についても適正な良識と適正な規制は必要である。それらが必要ないというのは、法律も何も必要ないと言っているのに等しいことである。自由というのは決して国益を無視し、かけがえのない祖国や父祖の方々を罵(ののし)り貶(おとし)めることではない。

北朝鮮に多くの国民を国際誘拐、拉致されているということが明らかとなってから長期間経過しているにも拘わらず被害者全員を国家の総力を挙げて救出しようとしないうの我が国。中国並びに韓国から、国際外交儀礼等に大きく反して、「日本の首相は靖国参拝するな」とか、「日本は謝り方が足りない。もっと謝れ。もっと賠償金を出せ。」或いは、「教科書には嘘でも自虐的な内容を記載せよ」と実に不当な干渉を受けながら、不当に国民の血税を巻き上げられながら、それらの不当な事に対して、毅然とした姿勢で必要な抗議や反論をする事を含めて適正な対処が出来ない今の我が国は全く独立国家としての体を成していないと言わざるを得ない。

「外国人参政権付与法案」や「夫婦別姓法案」並びに「人権擁護法案」及び「靖国に替わる国立追悼施設法案」や「慰安婦再補償法案」等々、多くの反日法案を用意している今の民主党政権は完全な「反日亡国売国政権」である。その民主党も、(検察に強制起訴される可能性の有る)小沢一郎が代表選に出馬したことによって、菅、小沢のどちらが勝っても代表選後、分裂、そして「政界再編」へと向かう可能性が出てきている。

その様な中で、我が国を「まともな国家」にするためには、しっかりした歴史観、国家観並びに世界観と強い使命感と(国家国民のためならばいつでも自らの命を投げ出すという)「覚悟」を持った人物を中心とする全く新しい政治勢力、自民党並びに心有る保守系政治家達を強力に引っ張っていける様な指導力、牽引力の有る「救国政党」を何が何でも創る必要がある。

我が国が1日でも早く「まともな国家」の姿を取り戻すことを強く念じて結びとする。

以上